

# 金光教では「取次」を大切にしています

「取次」とは、人と神さまの間に「取次者」がはいる、人の願いを神さまに祈り、また神さまの願いや思いを人々に伝えることをいいます。

金光教は、神さまが「悩み苦しんでいる人を『取次』で助けてくれ」と、農民である教祖さまに頼まれたことから始まります。

この「取次」で、多くの悩み苦しんでいる人が助かりました。

私たちは、「取次」を最初に始めた教祖さまを「金光大神」とお呼びしています。

「取次」は、教祖金光大神さまが取次を始めた江戸時代末期から現在まで、海外を含む約1500の教会で行われています。

神さま

人々の願いを神さまに祈る

取次者

神さまの願いや思いを人々に伝える

人間

# 「天地金乃神さま」 (一生死なない父母)

金光教では神さまと私たち人間の関係を親と子の関係にたとえます。天は父、地は母であり、親は神さま、子は人間、この親子の関係は切っても切り放すことが出来ない関係です。

あなたの周りに目を向けてください。お父さん、お母さん、子どもたち、親しい友人…。

山や海、川、そこに暮らす動植物たちを含め、あなたを取り巻くさまざまないのちが、あなたを生かし、支えてくれていることに気づくでしょう。

人間をはじめ、あらゆるものをととのえ、生かし、育てようとする天地のいのちを、私たちは「天地金乃神さま」とお呼びしています。

生かされて生きている私。かけがえのない貴重な人生。「生まれてきてよかった」と、喜びいっぱいと言えるような幸せに天地金乃神さまは導いてくださいます。

MEMO

ケータイサイトはこちら▶

Webでチェック!

金光教

検索



◆ e-mail w-master@konkokyo.or.jp ◆

なにひとつ 世話にならねばなし得ざる  
われぞとおもふ 世話になりつつ

四代金光様のお歌

私はいろいろな恩恵の中で生活を続けさせてもらっているということを、日に日に新しく思い、いつも忘れてはならないこととっております。

世話にならねば、生きていくことのできないのが、いのちであります。いのちが大切である以上に、そのいのちが世話になっているということをも、さらに大切に考え、大切に思わねばならないのは、当然のことであると思います。大切にするとすることは、粗末にしない、粗末に思わない、粗末にあつかわないということでもあります。

このように考えますと、あらゆる恩恵の中にあつて、世話になりどおして生活できているのだという事です。私どもは、恩恵の中でお世話になりながら、いろいろと困ったことや、つらいこと、難儀なことに出合っているわけです。難儀の中には、助かるように願わなければなりません。ながら、難儀をしているのであります。難儀の中にも、助かるように願わなければなりません。世話になっている恩恵に対しては、たとえ難儀の中でも常に感謝することを忘れないようにしたいものだ、しみじみ思います。喜ぶべきは喜び、感謝すべきは感謝し、その中で難儀なことは助かるように願ひ、努力していかねばならぬと思います。

とかく、困ったことばかりに力が入って、感謝すべき世話になっている恩恵を、真にありがたいと思う心が足りないことに気づくことが多いのであります。

自分の役にたつてくれているもの、自分が世話になっているものに対して、口に出して礼を言う言わぬは別として、「お世話になります」「ありがとうございます」と、お礼を言う心が、常に腹の底からわいてくるような自分でありたいと、私は願ひ続けております。なれてしまうと、恩恵を恩恵と思わず、世話になっていることをあたりまえのこととして、何とも思わぬようになってはおりはせぬか、ということをお自分自身に問いかけております。

『信心する者は、木の切り株に腰をおろして休んでも、立つ時には礼を言う心持ちになれよ』という教えがありますが、ものを言わぬものでも、自分が世話になり、自分の役に立つてもらっているものは、礼を言う心になれよという、この教えをいただいていることを、私はたいへんありがたいことに思っております。